

アゴラ

『衛生寿護禄』の「かなしき」マスク

—1884年、大日本私立衛生会の個人衛生啓蒙

うまれつき よわきはあれども
心から 身をよわくする 人ぞかなしき
—大日本私立衛生会『衛生寿護禄』(1884
年)より「虚弱」¹⁾

1884年に発行された『衛生寿護禄』の26マスのうち、唯一マスクが描かれているのは「虚弱」のマスである(図1、2)。帽子と黒マスクと襟巻きを身につけた男性が道端で立ち止まり、閉じた傘を杖のように持って、うつむいている。その後ろでは、笑顔の子どもが正面を向き、大きな荷物を背負った女性が左のほうに向かいながら、男性を眺めている。

このマスに付された冒頭の短歌における「人」は、立ち止まる男性のことだろう。マスクをつけたその姿は「かなしき」と形容された。ここから、当時のマスク観の一端を見ることができ

1. 大日本私立衛生会

日本公衆衛生協会の前身の一つ、大日本私立衛生会は、『衛生寿護禄』発行の前年、1883年5月に設立された。1877年から流行したコレラへの厳しい対策に対する「コレラ一揆」も各地で生じたなか、人々に衛生を啓蒙することを目的とした。

「私立」とは言え、主導したのは初代内務省衛生局長を務めていた長興専齋であり、ほかに陸海軍医や大学教授など医学界を代表する人々が参加した。この会はその後、牛痘種継所や伝染病研究所(ともにのち国立、現・東京大学医科学研究所)を経営・設置していく。

自ら副会頭となった長興は、「発会祝詞」で「各

自衛生」と「公衆衛生」を区別した。

衛生とは無病長命の方法なり。その一箇人に係わるものを各自衛生と言ひ、公衆に関するものを公衆衛生と言う。²⁾

『衛生寿護禄』で描かれているのは、このうちの各自衛生(あるいは個人衛生)にあたる。「出生」から始まり、「乳母」、「種痘」、「幼稚園」、「学校」などと続き、26マス目が「上り」である。なお、マスに書かれたすべての短歌を香西豊子を読み下している³⁾。

2. 「エフライ氏の護息器」の流行

このころのマスクは、「レスピラートル」(respirator)や「呼吸器」などと呼ばれていた。日本で確認できるものとして、石代十兵衛編『医術用図書』(1877年)にイラストが掲載され、松本市左衛門編『医療器械図譜』(1878年)に「エフライ氏の護息器」として紹介されている(図3)。

ここから、このマスクの起原は英国のジュリアス・ジェフリーズによる1836年の特許まで遡ることができる⁴⁾。これは肺病患者が暖かく湿った空気を吸えるようにするためのもので、口のみを覆うものと鼻口を覆うものがあった。『衛生寿護禄』のマスクは口のみを覆っている。

大日本私立衛生会が設立されたころ、このようなマスクが日本で「流行」していた。1883年に翻訳出版された『治肺新論』を見ると、「レスピラートル」の訳注に「我が国目下流行する俗に肺病よけと称する呼吸器」とある⁵⁾。訳者の鈴木券太郎は慶應義塾で学び、『大阪日報』などに勤めた(奥付には大阪の住所が記されて

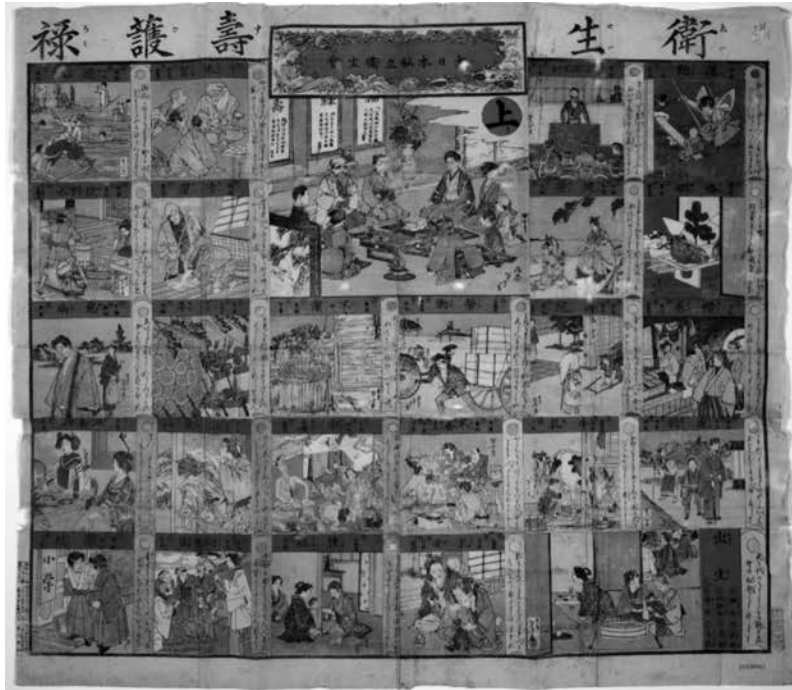


図1 『衛生壽護禄』



図2 『衛生壽護録』「虚弱」

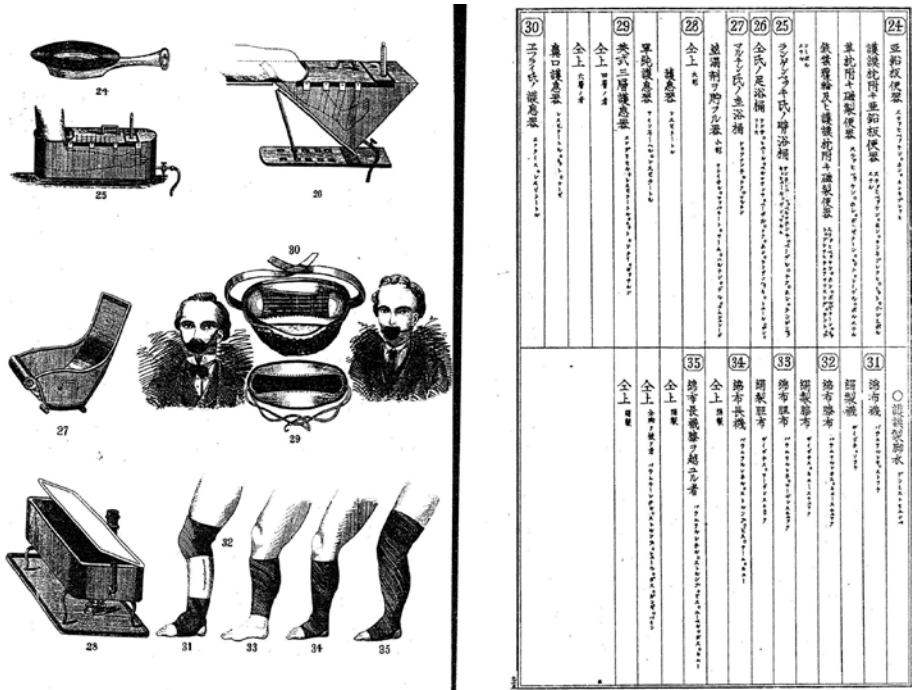


図3 松本市左衛門編『医療器械図譜』1878年、95-6頁、<https://dl.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/833113/52>。



図4 『衛生守護録』「襟巻」

いる)。少なくとも東京や大阪といった都市部ではマスクが流行していたと言える。

3. 推奨されなかったマスク

このマスクについて医療者が触れている文献は少ない。その数少ない例外が、帝国大学医科大学（現・東京大学医学部）を卒業したばかりの医師・竹中成憲による『肺病養生法』（1887年）である。

口より塵および冷気の肺に入らぬよう一種の呼吸器レスピラートルを用うべし。…肺病患者は塵埃じんあいおよび冷気の肺内に入らざるよう心掛ひじんきべきは明らかなり。塵埃を避くるはこの避塵器〔レスピラートル〕をもってその目的を達すべし。⁶⁾

このマスクが13項目中の2つ目に書かれていることは、後世から見ると意外に思われる。その後、結核対策としてマスクを推奨するものがあまり見られないからである。竹中の説明には、「バクテリア（早く言えば虫なり）」と、ロベルト・コッホによる結核菌の発見（1882年）という最新の知見も見られる。竹中の書はそれなりに広く活用されたようで、20世紀に入るまで7回版を重ねていく。

しかし、『衛生寿護録』では、マスクは推奨されない。マスクが描かれた「虚弱」のマスを見てみると、次に移動するマスとして、上部に「襟巻」、「牛乳」、「温泉」、「運動」の4つが挙げられている。そのうちの「襟巻」は、ほかの3つと意味合いが異なる（図4）。このマスに付された短歌を引用しよう。

わかきより おい老たるさまに 見ゆるなり
めがねえりまき あらずともがな¹⁾

眼鏡や襟巻きは老けて見える——。右後ろの男性のことを指しているのだろう。「虚弱」のマスに戻ると、こちらのマスク姿の人物も、襟巻きをつけている。

『衛生寿護録』で襟巻きは、「わかきより

老たるさまに 見ゆる」とともに、「心から身をよわくする」ことの現れとして描かれている。そしてマスクもこれと同じように描かれていたと考えられる。

これと対比的なのは、最上段の両端に置かれた「運動」と「遊泳およぎ」のマスである。前者では、「おこたらず 身をばつかえよ」と運動を促している。マスクをつけるよりも、体を動かすことを奨励しているのである。

このように、大日本私立衛生会の『衛生寿護録』では、マスクは不必要なものとして扱われていたと言える。

医療従事者が手術室以外で積極的にマスクをつけるようになるのは、少なくとも1900年の大阪ペストからである^{7), 8)}。さらに、政府や専門家が公衆衛生として人々にマスクを推奨するのは1918年からのインフルエンザの流行以降となる。

※『衛生寿護録』とそこに描かれたマスクの存在については、香西豊子氏（佛教大学社会学部）にご教示いただいた。記して感謝いたします。
（住田朋久）

参考文献

- 1) 大日本私立衛生会『衛生寿護録』1884年 <http://ir.u-gakugei.ac.jp/images/kms-kmi-view/viewer/18408065/>（東京学芸大学附属図書館）。
- 2) 長興専齋「発会祝詞」『大日本私立衛生会雑誌』第1号（1883年）、10頁。
- 3) 香西豊子「近代、サイの目、疫病経験——明治期の衛生双六にみる日常と伝染病」小松和彦編『禍いの大衆文化——天災・疫病・怪異』KADOKAWA、2021年、285-307頁。
- 4) 住田朋久「鼻口のみを覆うもの——マスクの歴史と人類学にむけて」『現代思想』第48巻第7号（2020年）、191-9頁。
- 5) ジョージ・トーマス・ングレーヴ（鈴木寿太郎訳）『治肺新論』日野九郎兵衛、1883年、137頁 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/835280/74>。
- 6) 竹中成憲『肺病養生法』三宅正信、1887年、2-3頁 <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/835376/6>。
- 7) 住田朋久『『ペスト』に見るマスク着用の始まり——1899～1900年、大阪・肺ペストクラスターと医師

の遺言」『週刊医学界新聞』第3415号（2021年）、3
頁 https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2021/3415_02。

- 8) Tomohisa Sumida, "Plague Masks in Japan: Reflecting on the 1899 German Debates and the Suffering of Patients/Doctors in Osaka," *East Asian Science, Technology and Society* 16, no. 1 (2022): 74-85.